

が国は急速に高齢化している。社会の一線を退こうとする団塊の世代と呼ばれる人たちは、まだまだ元気で知的興味や社会活動への意欲は衰えていないし、衰えないように支援する取組みを求めている。若い学生と高齢者が共に学ぶことを通して両者が活性化される新規な大学教育プログラムが求められる時代かもしれない。また、希望者に礼拝などを門戸開放した地域の人々と共に生きる大学像が望まれているかもしれない。

保育科から子ども学科へ

～子ども学科の現状と課題～

小 松 秀 茂 (初代子ども学科長)

1. はじめに

2010年4月、尚綱学院大学6番目の学科として、子ども学科は誕生した。子どもの専門家の育成を目指した、男女共学の、幼稚園教諭(1種)、保育士の養成課程に小学校教員(1種)養成課程を加えた、新たな学科の船出であった。今3年目を迎えている。まだまだ安定しない足取りだが、いよいよ来年は完成年次を迎える。まさに大詰めである。

本来であれば、本稿で行おうとしている「総括」のごとき仕事は、完成年次を終えた後で行うべきであるが、120周年を迎えた尚綱学院全体から見て一つの区切りとなるこの年度に、短大保育科を源流とする子ども学科のこれまでの来し方を振り返り、行く末を展望することは意味のあることと考える。

2. 子ども学科が誕生するまで

尚綱の「保育科」は50年余りの歴史を誇っている。東北中から女子学生が集まり、音楽教育が充実した保育者養成は、「尚綱の保育」あるいは「保育の尚綱」とまで言われるほどに、広く社会から高い評価を受けていた。改組轉換せずとも「それなりに」保育者養成を続けていくことは可能であったかもしれない。しかし、時代の趨勢は、それを許さなかったのであろう。筆者は改組轉換までの議論、意志決定への道のりを詳しく知る者ではないが、さまざまな議論の応酬が、また逡巡や葛藤さえも、あったのではないかと推測している。筆者が赴任してきた2008年に至ってさえ、「ややもすれば保育の尚綱が誇っていた伝統が脅かされるのでは」の危惧が、保育科の教員の間にさえ、程度の差こそあれ共通してあったように思う。

ともあれ、それは乗り越えられ、4年制大学新学科設置構想推進室は立ち上がり、順調に事は推移すると思われていた。が、メンバーの一人が病に倒れてしまった。結局、経緯は知らないが、赴任したばかりの筆者に、何故かしら代役の「お鉢が回ってきた」のであった。最終的には、何と初代学科長に祭り上げられてしまった。当然のことながら、「何でこの非力な私か」である。周囲の人たちもきっと大同小異の思いであったと思う。

2008年の7月にはもう、新学科設置構想実務委員会のメンバーとして、東義也先生や荒川由美子先生と新学科の構想、特にカリキュラム案の作成にかかりきりになることになった。当

時の筆者の手帳を顧みると、力量に乏しい筆者にとっては「こなすのが容易でない」仕事量になっていた。不破先生が構想の骨子を作ってくださいと、推進室の小島さんや半澤さんが整理してくれていたのも、仕事はやりやすかったものの、しっかりしたグランドデザインと緻密な実施計画がなければ、文科省が（及び保育士課程設置との関連では厚労省も）設置を認可してくれるわけもなく、不安と焦りが同居していた。

短期大学士課程から学士課程への転換はそれほど容易ではない。文科省の担当者からは、「短大の授業、カリキュラムを、そのまま移すようでは困る・・・4年制大学の専門教育を行う学士課程であることを十分に踏まえて・・・また、資格課程に傾斜しすぎた教育であっても困る・・・3つの資格すべてを取得させるような欲張った考えは少なくとも今はすべきでない（これは学科開設の時点から可能にした）・・・」と強く指導された。教員スタッフの研究・教育実績及び授業科目担当の適合性、カリキュラム及び実際の授業運営、施設・設備、備品の状況はもちろん、入学者定員の充足と管理、就職指導の果てまで、そのチェックは厳重であった。

また、厚労省と文科省とでは、認可に関する考え方・指導に微妙な違いがある印象もあった。もともと頭を悩ました、というより意表を突かれたのは、「子ども学科が開設されても保育科は全員卒業するまで存続する。その体制を維持する人員を確保する必要があるが、現行の案では専任全員が子ども学科に移籍してしまい、保育科が取り残されてしまう。対策は如何」という厚労省からの指摘であった。同様の経験をした他大学からの情報を基に、そうした配慮は特段必要ではないと認識していたので、正直慌てた（筆者だけかもしれないが）。結局は、元保育科専任であった先生3名にお願いして、廃止されるまでの保育科を支える人材（非常勤）としてご協力をいただかねばならないことになったのであった。

3. 子ども学科の現状

1) 子ども学科のアドミッション・ポリシー

子ども学科が求める学生像は、「子どもを深く総合的に理解する力を獲得して、子どもの専門家として社会に貢献したいと願う向学心旺盛な学生」である。実際に期待される入学者は、以下のような願いを持つ人たちである。

1. 保育所、幼稚園の先生になりたい（あるいは将来、保育所・幼稚園を経営してみたい）
2. 小学校の先生になりたい
3. 児童福祉施設で保育士として働きたい
4. 公務員等になって児童福祉行政にかかわる仕事がしたい
5. 子どもの福祉支援活動にかかわる市民団体、NPOなどで働きたい
6. 子ども関連の産業・企業で働きたい

幸いなことに、学生募集は今までのところ、定員を大幅に越える志願者数を維持しており、順調といってよい。

2) 子ども学科のディプロマ・ポリシー

迎えた学生に期待する「卒業までの学修活動の成果」は、「子どもの心と体を理論的、実践的に理解することを通して、子どもが全面的に発達するように支援することができる」というものである。

3) 子ども学科のカリキュラム・ポリシー

上記ディプロマ・ポリシーを達成するために、言い換えれば、子どもの専門家になってもら

うために、共通教育、専門教育科目、他学科専門教育科目が用意されてある。そのうち、基幹科目である専門教育科目では、「子どもの心理と健康」「子どもの福祉」「子どもの保育と教育」「子ども文化と社会」という4つの領域（科目群）が「4本柱」として設定されている。子どもたちの豊かな成長・発達を支援していく「子どもの専門家」には、以下に挙げる4つの資質が必須であると考えたからである。

- i) 子どもの心と体の発達について理解でき、それを支える条件・方法について考えることができる
- ii) 子どもの人権及び福祉について識見を持ち、子どもの福祉に制限を与える要因について理解でき、その理解に基づいて制限を克服する条件や方法について考えることができる
- iii) 子どものより豊かな成長・発達を支える保育・教育に関する理論と歴史的研究成果について深く理解し、実際に子どもの成長・発達を支える方法について探求し、実践できる
- iv) 子どもを取り巻く文化的・社会的環境について分析できる力を持ち、子どもの豊かな成長にとっていかなる環境を提供すべきかを考えることができる

ともすれば、これまでの保育・教育学系の学科においては、発達と教育と福祉の領域に関する科目が重視されてきたきらいがあるが、本学子ども学科では、子どもをめぐる近年の「危機的な」状況を斟酌し、福祉の領域を強化しつつ、子どもを取り巻く環境に関する深い理解へと導く「子ども文化と社会」の領域を加えた。かかる4領域にまたがって学習させることで、子どもの総合的（多角的、他水準的）理解を促し、保育、教育、福祉の領域で、さらには地域ないし世界にまたがる広い活動領域で、子どもの生活、成長、幸福に奉仕する人材に育ててもらうことを期待してのことである。

4) 教育環境

子ども学科は、音楽教育環境をはじめとして充実した教育環境を備えている。中でも特筆すべきは、総合人間科学部に位置することで生じる学生にとってのアドバンテージである。子ども学科は、人間心理学科、現代社会学科、健康栄養学科、生活環境学科、表現文化学科の5学科と共存しているが、子ども学科は、自身の持つ学際性からして、他学科を結びつける一つの結び目となる可能性を持っている。これは、「他学科開設科目の履修も可能にすることによって幅広い教養と深い専門性を醸成することが可能な強力な教育環境」を我が子ども学科は持っていることを意味する。

少人数教育であることも我が子ども学科の自慢の一つである。子ども学科は専任教員数は15名であるが、1学年定員80名である。3年次編入10名を加えて90名としても、教員一人当たりの学生数は、わずか6名である。

4. 子ども学科の今後に向けて

私たちは、4年制の子ども学科開設という大きな決断をし、新たな歴史をスタートさせた。完成年度を迎えていない現在において軽々に判断はできないが、このことによって、私たちは何を得ることができたのか、仔細に分析し、冷静に評価する必要がある。受け入れた学生の質、学生生活の豊かさ、教育の質・達成水準、進路・就職状況等々の点について正確に把握し、点検・評価しなければならない。

一方で、「保育科廃止によって弱体化した部分はないか」の分析も敢えて行わなくてはならないだろう。例えば、保育科音楽コースが廃止されたことは、尚綱が維持してきた音楽教育の

質が低下したかの印象を与えかねず、学生募集にも影響を与えかねない。伝統の一つである音楽教育を発展的に継承していく方針をとっている（例えば、共通教育に「総合音楽（オーケストラ）」を設定してあるし、専門教育や資格課程においても音楽教育が可能な科目が多く配置されてある）が、それを社会的にも認知してもらうための方策が必要かもしれない。

現在、学科開設後のこれまでの経過を踏まえて、完成年次が終了したあとのさらなる改善に向けて、今後数年間を見据えた「中期目標・中期計画」が策定され、その実現に向け活動を開始したところである。そこで掲げられている子ども学科の目標（既に実施に移しているものも含む）をいくつか紹介して、本稿の結びとしたい。

目標1：子ども学科の教育に関するグランドデザインを点検・評価し、見直す。

目標2：カリキュラムを見直す（特に、授業科目構成、履修登録単位数、教育・保育実習の実施年度等について）。

目標3：新たな人事計画を策定し、スタッフを充実させる。

目標4：実習支援室を強化し、教育実習、保育実習に加えて、介護等体験、初期現場研修、ボランティア活動、ティーチング・アシスタント活動、課題研究フィールドワーク、インターンシップ活動等をも支える包括的な支援体制を確立する。

目標5：子ども発達支援センターの活動を充実させる（子育て支援・相談業務、リカレント教育、講演会活動を展開する）。

目標6：「希望者全員就職」に向け、学生支援体制をより強化する。

目標7：大学院設置の意義と可能性について検討する。

<謝辞>

筆者が尚綱にお世話になることになったのは、2008年4月1日からである。2010年に短大保育科を改組転換し、4年制大学の新学科を開設するということを踏まえての採用であった。改組転換に向けてのさまざまな作業に協力する覚悟で赴任したのではあったが、かほどまでの重責を担うことになるとは夢にも思っていなかった。

今にして思えば、「やります」と応諾したこと自体が無謀であったと思う。とにもかくにも大過なくここまで来れたのは、学院理事長、学長先生をはじめ多くの方々の支えがあったことであった。記して感謝したい。

特に、推進室のメンバーとして苦楽を共にした小島里美さん、半澤泰也さん、東義也先生には、単なる仕事上のレベルを超えたお付き合いをしていただいたと勝手に思っている。特別の思いを込めて謝意を表したい。

最後に、私事で恐縮であるが、この間私は、妻と義母と実父を失った。子ども学科の完成と一緒に迎えることができなかったことはとても残念である。仕事の継続に背中を押してくれた家族に感謝と同時に謝罪したい。